

富士参詣の道を行く

赤色立体地図で見える

富士山道

富士山道の概要

江戸の日本橋を起点とする甲州道中の大月宿(大月市)で分岐し、谷村(都留市)を経て上吉田(富士吉田市)に至る道。江戸八百八講といわれた富士講の人びとが、富士山の頂上を目指して歩いた道である。



富士山道を歩こう!

三つ峠駅	1.3km	小沼浅間神社	3.0km	小見見浅間神社	1.2km	明見見	2.8km	小室浅間神社	0.3km	(下吉田)	1.7km	金鳥居	0.4km	旧外川家住宅	0.3km	身禄堂	1.0km	北口本宮富士浅間神社
------	-------	--------	-------	---------	-------	-----	-------	--------	-------	-------	-------	-----	-------	--------	-------	-----	-------	------------

身禄堂

身禄堂は、富士吉田市内上吉田の中宿にある小さなお堂。堂内には、富士山七合五勺の烏帽子岩で即身仏(ミイラ)となった行者である食行身禄(じきぎょうみろく)が祀られている。(スポット7)エリア内)

下吉田倶楽部

昭和初期に建てられた古い駅舎をリノベーションし、工業デザイナーの水戸岡鋭治氏がデザインを手がけた下吉田駅構内のカフェ。線路側の席は、走る電車を目の前に楽しめる。

スポット5

新倉富士浅間神社

新倉富士浅間神社の祭祀

新倉の高台に鎮座する浅間神社は、剣丸尾(けんまるび)溶岩を見下ろす位置にある。溶岩の流れを止め、その災害を鎮める祭祀を行ったことが推測される。浅間神社の鳥居越しに富士山を望むと、鳥居の中に富士山が額縁のようにすっぽりと収まる。富士山の火山活動が盛んだった当時、富士山を真正面に臨むこの場所で、人びとは火山活動を鎮める祭祀を行ったことが考えられる。



「三国第一山」

新倉富士浅間神社の鳥居には、「三国第一山」の額が掲げられている。三国とは、震旦(インド)・唐土(中国)・日本のことで、中世には、全世界を意味していた。三国第一山とは、世界一の山を意味していた。通常、鳥居は神社と一体のものとして認識されているが、富士山では必ずしも神社と対応していない。これらの鳥居は、神体山である富士山そのものを拝する、そのための施設として建てられたことを意味している。

新倉富士浅間神社の祭礼

40年以上前から吉田の火祭りに、この地域の人びとが富士山に模した神輿を担ぎ続けた。新倉から上吉田へ、富士山形の御山神輿に綿帽子を被せたものが、少年たちに担がれて火祭りに渡御したという記録が残っている。「富士の御山に飾り」という表現は、年ごとの製作を示すものであろう。

スポット1

小沼(道標・上手宮)

富士山道と西柱

江戸を中心に各地に向かう街道の一つに甲州道中(街道)があった。富士山を目指した関東の平野部の人びとは、甲州街道を西にたどって大月宿で分岐し、桂川沿いに谷村路を遡上して吉田へとやってきた。富士参詣の人びとは、江戸からの街道の全体を富士道又は富士山道と称していた。

富士山道をやって来た人びとが八の字の形をなして緩やかに裾を引く富士の御山の全体を、最初に目にする場所が現在の西柱町小沼付近だった。

小沼の旧道は「宿通」と呼ばれ、江戸時代から近代を通じて夏山に集う登拝者を受け入れる宿場として賑わった。小沼上(上町)には三軒の宿屋、旅籠があり、そのうちの軒は身禄茶屋と呼ばれて、主に富士講中が立ち寄る場所だった。近代に入って、明治17(1884)年は食行身禄(じきぎょうみろく)没後の百五十年忌にあたり、その際に建立された記念碑を見ることができる。

鉄道馬車の軌道

明治時代、この辺りには「テト馬車」(鉄道馬車)と呼ばれる馬車鉄道が通っていた。西柱町役場前の旧道に沿った商店付近は、ここから吉田、さらには東海道線(現JR御殿場線)の御殿場駅を結んだ都留馬車鉄道の路線と、大月駅から谷村(都留市)を経て小沼を結ぶ富士馬車鉄道の路線とが結節する乗り換え場所だった。軌道の幅が異なっていたため、乗り換えのための停留所ができ、「交換所」と呼ばれていた。停留所ができたことで、宿屋なども次第にここに集まって、この付近が小沼の中心地となった。

道はそのまま進し、米倉橋を渡って明見へ向かう。明治の初め頃から富士山への道筋が次第に付け替えられて、西柱小学校の手前から右へ揚坂をのぼり、上暮地古屋を経由して同新屋の宿通りをのぼり、尾垂山の山裾に沿って下吉田へ出ていた。明治19年(1886)に現在の上暮地新屋の宿通りへ直結する新道が開通し、この道を利用するようになった。

小沼浅間神社

地元では「上手宮さん」と呼ばれて親しまれている。721年の創建とされ、富士山の神である木花開耶姫命(コノハナサクヤヒメノミコト)と天津彦彦火瓊瓊杵尊(アマツヒコヒコホノニニギノミコト)の夫婦を祭神とする。本殿は、一間社入母屋造、向拝唐破風造で壁面・柱などに鳥獸・草木などの見事な彫刻がなされている。神輿は八角形の円堂型式で、天明4年(1781)に建造されたもの。

スポット6

下吉田・小室浅間神社

下吉田

江戸時代より、下吉田では蚕を育てて繭を取り絹織物を織っていた。富士山の豊富な伏流水も、この地の織物を支えた。必要に応じて染色の水を使い分けるなど、自然条件を活用して産業を豊かに育ててきた。

第二次大戦後、織物の需要が一気に高まり、下吉田も機場(はたば)として大きく発展した。表通りの東側には絹織物を買ひ継ぐ問屋が軒を連ね、「絹屋町」と呼ばれていた。毎月1と6のつく日に絹市が開催されると、各地から問屋が集まって軒先で取引を繰り返した。現在でもこの絹屋町界隈は問屋の街並みの雰囲気を残している。

小室浅間神社

下吉田の小室浅間神社では、1月14日深夜から翌朝15日の未明に、筒粥神事が行われる。これは、24本の葎の筒の中に粥と米の粒がどのくらい入ったかで、その年の農作物の豊凶等を占う作物占いの一種である。この神事は男性のみで行われ、前の晩に葎ヶ池温泉で身を清めてから神事に臨んでいる。この神事は、単に農作物の豊凶だけでなく、富士山への登山者(道者)の多少も占われる。江戸時代以前は、上吉田に居住する御師たちも氏子となっていたが、御師の暮らしにとっては、登山者の多さが、その暮らしを左右する関心事だった。占いでは、全体の登山者数に加え、甲州・信州・駿州・武州・相州の順序で、各方面からやってくる道者の数が占われた。御師はその結果を参考に、登山者数が少ないと予測された方面に、より力を入れて布教に出かけて行ったという。

下吉田に加え、河口や内野など、富士山北麓地域の主だった浅間神社でも、このような筒粥の占いが行われている。このように、富士山の山もでは、年間を通して富士登山者を迎える準備をしていた。

愛染地蔵堂

愛染は愛染明王のことという。下吉田の入口にも愛染の地名がある。古くは愛染明王を祀った施設が存在したようだが、現在は、地蔵菩薩を祀る御堂に変わっている。この愛染は下吉田に入って最初に水垢離を取る場所だった。近くでは西念寺が富士袈裟を配布した。垢離を終えた人びとは、富士袈裟を掛け、行衣を身につけ、御山を目指した。

境内には、きれいな水が湧く池がある。富士山に向かう人びとはここで水行を行った。また、三つ峠山中興の祖「空胎上人」の水修行の場と伝えられている。

境内には桂の大木と神木の樺の大木がある。



スポット2

上暮地(剣丸尾溶岩)

剣丸尾溶岩

富士山北麓には、火山性扇状地が広がっている。この中を幾筋もの溶岩流が流れている。繰り返し大規模な火山活動が起こった地域で、この地域では新富士火山の新时期溶岩のことを「〇〇丸尾」と呼んでいる。

剣丸尾溶岩は約千年前、山頂付近から小御岳火山を迂回して、スバルラインに沿うように流出し、吉田・船津の両胎内を形成し、その流末が上暮地白糸付近に達している。溶岩の流れが剣の形に似ていることから「剣丸尾」と名付けられたという。

「暮地坂」

上暮地は、標高が650m前後と富士吉田市域では最も低いことから、ほかの地域に比べて温暖な気候となっている。冬の寒さが厳しい同市域では、甘柿の実も渋柿になってしまうが、上暮地では甘柿となる。また、唯一二毛作が可能である。

この気候条件の境界となっている長大な坂を「暮地坂」(くれちのさか)と呼んでいる。この坂は剣丸尾溶岩の末端部にあたっている。富士吉田市の東側に位置する道志山地と西側に位置する御坂山地が上暮地に向かって狭隘部を形成しているため、富士山の噴火によって流れ出した溶岩がここで詰まり、せき止められ、このような坂になっている。

古くは、坂の下は「下郡内」と呼ばれ江戸・大月方面との結びつきが強く、一方、坂の上は「上郡内」と呼ばれ駿東・沼津(静岡県)との結びつきが強かったという。

スポット7

上吉田・登拝拠点の町

金鳥居

通常、鳥居は通俗的な世界と神域との境界を表示するもので、吉田町の入口に建つ金鳥居は、一鳥居とも認識され、鳥居の内側も神域であるかのように信仰的な町が形づくられていた。

富士山頂までの要所に建つ鳥居の一番目のものにあたる。この鳥居も富士山を拝する鳥居であり、現在は「富士山」の額が掲げられているが、かつては「三国第一山」と書かれたものだった。

御師町

『甲斐国志』編纂当時の登山道は、北に吉田口、東の須走口(小山村)、南口にあたる村山口・大宮口(富士宮市)の各々からの四道であった。須走道(須走口登山道)は八合目で吉田道(吉田口登山道)と一緒にるので、そこを大行合(おおきあい)という。村山道も途中で大宮道と合流するので、頂上に至っては南北二道であった。それ以前の古い登山道に須山口(裾野市)があった。吉田(上吉田)は「勝山記」の中に「千軒在所」と記され、富士山登拝にかかわる記述が散見されることから、元亀3年(1572)に現在地に移転する以前から御師を中心とした町場が形成されていたことが知られる。

江戸時代には、江戸八百八講といわれるほどに分立した各地の富士講中が、富士道、富士山道を通じて吉田へと参集した。最盛期には100軒近くの御師宿坊や関連する家々が連なり、富士信仰の登拝拠点の町へと発展した。

御師坊

表通りからタツミチ(逢道、引込み路)の奥に御師坊(御師を生業とする家)があって、奥まった住宅へと通じる細長い引込み路は、神社の参道のようにも見える。これは本御師の格式を持つ家の特徴で、その一軒が御師の塩屋(旧外川家住宅)である。同家の主屋は約250年の歴史をもつ。中門をくぐると、敷地内にかワ(間ノ川、ヤーナガワとも)がある。宿泊する富士講中は、ここで手足を洗って清めた。

江戸時代に江戸やその周辺の関東で流行した富士講は、集団で登山を行った。御師は自宅を開放して講中を受け入れ、富士講のほとんどを足運で富士信仰の布教に努めた。坊入りした講中の食事や不淨穢いの祈禱、登山の案内などの世話をした。

スポット3

小明見(明見湖)

明見湖の垢離場

明見湖は小さな湖沼であるが、内八海の一つに数えられ、葛飾北斎の『富嶽百景』にも「阿須見村の不二」(あすみむらのふじ)として取り上げられている。

江戸時代、この辺りは小明見村の一角で、富士山を目指す人びとがここで水垢離を行った。人びとは周辺の山裾から湧き出す豊富な湧水で身を清めてから富士山に向かった。

小明見村は、少なくとも江戸時代には富士山内の五合目と山頂の観音ヶ岳(現 伊豆岳)に小屋場を所有していた。山頂の小屋場は「初穂打場」(はつほうちば)の先にあり、この山小屋の守護仏は山内で最も古い仏像として、現在も大切に保存されている。小明見村が富士山に対して持っていた役割がうかがえる。

銅絃道(なべづるみち)

明見橋のたもとから山裾に沿って延びる銅絃道は、その形状が銅弦(つるの鋼の取っ手)に似ていることからそのように呼ばれている。

この辺りは檜丸尾第一溶岩が流下し、溶岩の縁辺部から湧水が湧き出している。絹織物を織る糸を染色してゆすぐのに用いたために、この湧水を「イトギソバ」と呼んだ。「糸ゆすぎ湯」=「イトユスギバ」=「イトギソバ」と転化したと考えられる。かつては踏石がはめ込まれていた、股を踏ん張って糸をゆすいでいた。



小明見浅間神社

火事で焼失する以前の小明見浅間神社の本殿は、溶岩を背にして建っていた。これは、富士山の火山活動を鎮めるため、この浅間神社が建造されたことを推測させる。その後、本殿の再建時には、小明見新田が形成されたので、二つの集落を護持する今日のような神社の向きにしたという。

江戸時代には、富士権現と称され、修験系の富士信仰の拠点になっていた。大晦日や例祭には、太々神楽が境内の神楽殿で奉納され、獅子神楽が地内を廻っている。

スポット8

北口本宮富士浅間神社

富士講登拝の起点

富士講が多く利用したのは吉田口だった。登拝の基点となるのが下浅間(北口本宮富士浅間神社)だった。2合目の富士御室浅間神社は上浅間と呼ばれていた。富士山への登山方法は、境内で一定の方法で登拝するための儀礼を行い、裏手の登山門から富士山を目指して出発した。夏山には、大勢の登拝者が参詣した。

富士山と鳥居

下浅間の大鳥居には、「三国第一山」と記されており、富士山そのものを神体山として拝し、この鳥居をくぐって登拝した。

下浅間の大鳥居は六十年毎に造替されてきた。その都度鳥居を少しずつ大きくしてきたという。この大鳥居は木造鳥居としては、国内でも最大級のもの。両部形式と呼ばれる形式で、このタイプの鳥居は神仏習合の性格を持つ社寺に建てられる。

北口本宮富士浅間神社の建築

東宮本殿に永禄4年(1561)の造営を伝える墨書銘が残ることから考えると、天文10年(1541)頃に富士山の遥拝の地であった諏訪森の地内に浅間明神が勧請され、永禄年間(1558~1570)にかけてその社殿が整備されていったものと推定される。歴代領主の崇敬を集め、文禄3年(1594)に西宮本殿を浅野氏重が、元和元年(1615)には現本殿を鳥居次が造営している。慶安2年(1649)には、秋元富朝により修復が加えられて、拝殿・幣殿もこのとき修造された。

宝永2年(1705)、秋元氏が転封となり都留郡は幕府領となる。大名という庇護者を失った神社は社殿の維持に苦しみ、享保20年(1735)には、江戸小伝馬町の富士行者村上光清を中心とした富士講中が費用を負担する大修理が行われた。以後、元文年間にかけての普請で境内も拡張され、巨大な割拝殿をもつ本殿、神楽殿、階身門、大鳥居が一直線に並び、現在に近い景観ができあがった。

スポット4

大明見(古宮)・桂川

「明見よりの古道」

古い富士山への参詣路は、杓子山の支尾根である背戸山(せどやま)の後線越えて大明見から大明見に抜け、そこから桂川を渡って古吉田に至る道が使われていた。江戸時代に編纂された地誌『甲斐国志』には、「明見よりの古道」としてこの道が掲げられている。背戸山のピークを金剛坊と呼ぶ。山中の「二王坂」(仁王坂、おにざか)と呼ばれる鞍部は、仁王を祀る仁王門が存在したと伝えられる。仁王坂から二筋に道が分かれ、一方は古吉田から富士山へ、もう一方は忍野・山中湖村から駿河の竹之下(小山村)へ通じていた。



「大明見湖」

大明見には、かつて湖沼が広がっていた痕跡がある。大明見は、富士山の火山活動によって流出した檜丸尾第一溶岩の台地上に位置している。溶岩が桂川に沿って流れ下ると、桂川に流れ込む支流は出口を塞がれ、そこに一時的な湖沼ができる。そのようにしてできたのが「大明見湖」や「古明見湖」である。その後、大明見湖は山麓の侵蝕によって干上があったが、その後も低湿地であり続け、水に恵まれた場所であったことから水田に適し、稲作を中心としたのちの時代においても人びとの生業の場となってきた。現在も、ところどころに湿地の景観を保持し、湿性植物のアンが繁茂している。

災害の元凶としての富士山

天保4年(1833)は、全国的に深刻な飢饉となった非常に寒い年であり、旧暦の4月8日、現在の5月下旬になってようやく雪解けが始まった。しかし、表面がわずかに解け出した雪解水は雪の斜面を勢いよく流れおち、土砂や樹木をまきこんで、富士吉田地域の平坦地を広範囲に覆ってしまった。

桂川沿いには、この大雪代の被害を受けて天保6~8年に築かれた雪代除の堤防が残る。植栽された樹木は、堤防を強固にするような根張がする樹種が選ばれている。

富士山は信仰の対象であると同時に、災害の元凶ともなっていた。山もとに住む人びとは、富士山を愛する一方で、それがたらず災害とも折り合って暮らしてきた。

ぎょうえ 行衣

富士山に信仰的に登山する人びとにとって、その山上世界は「あの世」と観念されていた。登山は修行であり、また擬死再生することであり、そこからの下向は新たに生まれ変わることを意味していた。そのため、死装束と同じ白衣の行衣を着用した。

死出の旅立ちと同じ単衣のものであり、左前に合わせ、結び目も縦結びとした。手には金剛杖を持つ。杖につけた小旗はマネギといひ、講中の目印である。お中道を巡る先達(せんだつ)が頭に巻くさしらの布は宝冠(ほうかん)と呼ばれる。

御朱印

御朱印とは「お参りの証」。そして、「お参り」とは、神社に参り、神様の御縁を結ぶ、またご縁を深めること。つまり御朱印とは、その証、いわば「神様との御縁の証」である。



観光案内所・道の駅等

施設名称	TEL	トイレ有無
はす池体験工房	0555-22-3016	有
下吉田倶楽部(下吉田駅構内)	0555-22-1777	有
富士吉田市観光案内所	0555-22-7000	無
御師お休み処富士吉田インフォメーションセンター	0555-24-8660	有
道の駅富士吉田	0555-21-1225	有
小佐野家住宅復原(ふじさんミュージアム庭内)	0555-24-2411	有
(一社)富士の国やまなし通訳案内士会	0555-30-2089	—
富士北麓観光案内所(冬季休業)	0555-72-9900	有
中ノ茶屋(冬季休業)	090-4614-0223	有
忍野村グリーンセンター	0555-25-3000	有
忍野村観光案内所	0555-84-4221	有
富士河口湖観光総合案内所	0555-72-6700	—
山梨県立富士山世界遺産センター	0555-72-0259	有
河口湖フィールドセンター	0555-72-4331	有

※季節、時間帯等によりトイレが利用できない場合があります。また、一部施設では有料施設内にトイレが設置されています。



富士山世界遺産センター
Fujisan World Heritage Center
山梨県立富士山世界遺産センターは、世界遺産の価値をわかりやすく紹介する施設です。富士山の自然と人の関わりの歴史とその広がりを感じることができます。

富士河口湖町船津6663-1
TEL:0555-72-0259 FAX:0555-72-0211
WEB:http://www.fujisan-whc.jp

監修

山梨県立富士山世界遺産センター 堀内 眞
富士河口湖町教育委員会 杉本 悠樹

お問い合わせ

山梨県富士山世界文化遺産保存活用推進協議会
事務局:山梨県県民生活部世界遺産富士山課
TEL:055-223-1316



表紙の右下は、REBIRTH! 富士講プロジェクトのマスコットキャラクター「みるくん」です。
作画:吉田葉子